看護の初学者への看護技術演習と実習

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 栗原, 幸子 メールアドレス: 所属:
URL	https://opcnr.repo.nii.ac.jp/records/423

看護の初学者への看護技術演習と実習

栗原幸子（生活援助・療養援助技術I、生活援助・療養援助技術実習）

教育上の課題と工夫

基礎看護では、主に 1・2 年次学生の演習・実習を担当している。看護の初学者である彼らは、看護の実践現場や対象者のイメージが乏しく、また、看護や看護技術の学び方についても学習途上である。今回の遠隔演習や学内実習においても、看護の具体的なイメージを描きながら原理原則を学んでいけるよう、授業方法を工夫した。

1 年次後期開講の「生活援助・療養援助技術I」は、入学後初めて看護技術を学修する科目である。遠隔演習となった際には、まず、対面演習の時と同様に、各技術の目的・行動のポイント・根拠を整理する『Skill note』の作成を課題とした。対面演習の場合は、この後、Skill note に基づいて技術演習を行う。そして学生たちは、手順を追うだけでは看護技術にならないこと、対象や状況に合わせた応用が求められること、応用するためには根拠を押さえた学修が重要であることに気づいていく。遠隔でも同様の学習体験が必要と考え、Skill note に記載した内容をバーチャル空間で実施してみる「アバター形式」での演習を行った。具体的には、実習室の映像をビデオカメラで投影し、web 会議システム（Zoom）を用いて学生へ LIVE 配信した。そして、学生が看護者役の教員に指示を出し、教員が学生の分身（アバター）として、技術を実施した。受講した学生たちからは、「間接的に技術を行った感じを味わった」「リモートでも実際に演習を行っている感覚に近づいた」という感想があった。一方で「言葉で伝えるのは難しい」「見るのと実際に行うのでは違うと思う」といった意見も聞かれた。

2 年次後期開講の「生活援助・療養援助技術実習」は、初めて患者を受け持ち、看護過程を展開する科目である。学内実習では、実際の病院のイメージをもってもらうため、実習施設に協力いただいて、オンラインで病院オリエンテーションを行った。また、実習病院で使用されている物に倣って、診療記録・看護記録・体温表など多様な資料で構成された電子カルテを作成した。模擬患者のカルテ情報は実習期間中毎日更新し、臨地での実習時と同様に、学生は毎朝電子カルテから情報収集を行い、患者の状態をアセスメントした。実習後半は、立案した看護計画に基づいて、シミュレーターや患者役の学生に看護技術を実施し、実施後のカンファレンスで評価をした。このように看護の現場を模して、情報収集・アセスメント・計画立案・実施・評価の一連の看護過程展開を行った。学生たちは、情報を丁寧にアセスメントし、必要な看護（ケア）を見いだせていた。しかし、対象の反応・状況を見定めながらコミュニケーションをとることや、状態の変化に合わせて計画を修正することは、実際の患者が不在の学内実習では限界を感じるところであった。

With コロナに向けて

実習室での演習や臨地での実習が行えないことから、必要に迫られて行った「アバター形式」の演習、電子カルテ等を利用した模擬患者の看護過程展開であったが、これらの授業方法ゆえに得られた学習効果もあったと考える。今後、通常の演習・実習が行えるようになった際にも、今回取り組んだ授業方法を取り入れ、学習効果を高めていきたい。